

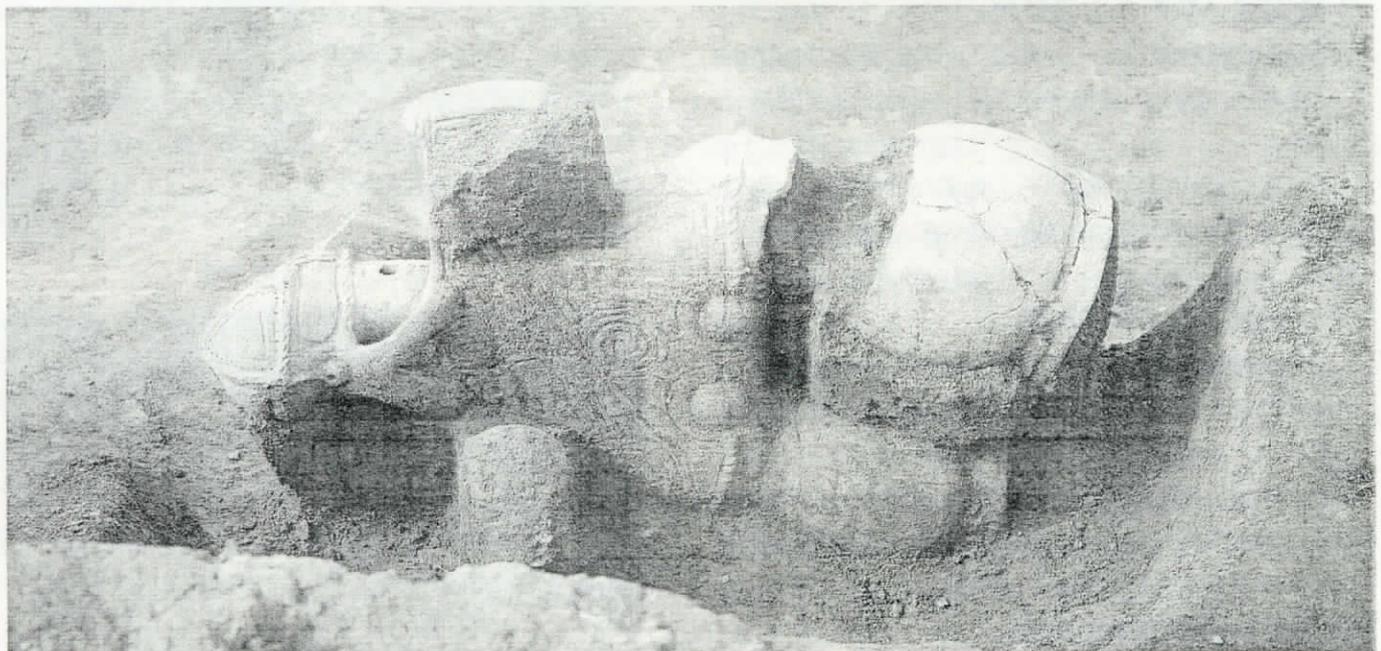
# 茅野市 八ヶ岳通信

—文化財課—

## 縄文時代後期大形仮面土偶、土坑内に横たわって出土



土偶の出土状況（正面より）



土偶の出土状況（背面より）

茅野市湖東山口中ツ原遺跡において、高さ35cmを測る縄文時代後期の仮面を覆ったような表現を持つ大型土偶が、墓墳のような坑の中に頭を西に、脚を東に顔面を北側に向けた横向きの状態で埋められていました。どのような理由で埋められたのか、多くの謎を秘めてその解明を待っています。

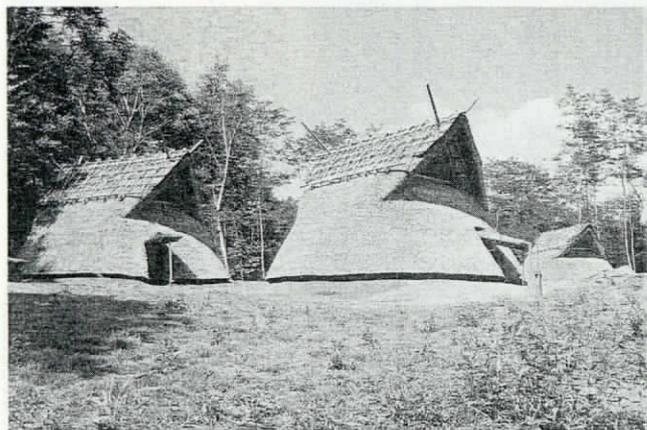
## 住民参加型の博物館を目指して

### ○ 茅野市5000年祭

尖石縄文考古館が、平成12年7月20日にオープンしました。

開館初日から4日間は、尖石遺跡を中心に茅野市5000年祭が開催され、15000人を越える来館者がありました。野外で行われた縄文御柱やシンポジウム、縄文文化賞の授賞式、コンサートへの参加者もあるため、実際には20000人ほどの人々が4日の間に考古館周辺に訪れたこととなります。

開館に併せ、与助尾根地区を中心とした史跡整備を行い、復元家屋6棟を建設し、周辺に170余本のクリ、ドングリなどを植樹しました。縄文の森の散策が可能になりました。



復元された住居址

### ○ 特別展「三内丸山遺跡展」

開館記念特別展として、青森三内丸山遺跡から出土した土器や土偶、石器を多数借用し、特別展を開催しました。

同じ縄文時代中期の資料も、地域が異なると、形や文様が違うということもわかったのではないかと思います。

### ○ 企画展「一ノ瀬遺跡展」

遺跡は縄文時代の中期から後期にかけての遺跡で、耳飾や黒曜石製の石鏃（矢尻）などが多量に出土しました。

展示では、古くから遺物を収集した田美文朗氏の資料や、宮坂英式・虎次両氏が同遺跡出土の土器を復元している写真なども展示されました。

### ○ 仮面土偶の速報写真展

8月下旬にテレビや新聞等で大きく報道された茅野市湖東中ツ原遺跡出土の仮面土偶の写真展を開催し、注目を集めました。

写真展は年内で終了しましたが、取り上げ作業のビ

デオ（約10分）は、学習コーナーやガイダンスルームでごらんいただけます。

4月中旬には、修復作業を終えた仮面土偶を公開する予定ですのでご期待下さい。

### ○ 縄文祭

縄文を楽しむことを目的に始めた縄文祭も、今年で4回目となりました。ちょっと寒かったこともあって、縄文土器で作る縄文汁に人気が集まりました。他にも、土器や石器作り、火おこしや土器の文様付け、古代機織り、あんぎんなどの体験、弓矢を使つて的を射るイノシシ狩りなどが行われました。

### ○ 縄文教室

毎月第2土曜日に実施し、土器や石器づくり、古代機織り等を体験しています。

### ○ 博物館活用の日

今年から新しく設けられた行事です。博物館の収蔵庫見学をしたり、周辺の史跡公園内の自然観察をしたりしています。

### ○ ワークショップ

昨年の1月に発足して1年が経過しました。全体的な学習会を経て、今では環境復元グランドワーク、共同研究、展示解説・体験支援の分科会に分かれて学習しています。

### ○ 尖石友の会

土器づくりを中心として、毎月定例会を開いています。新しいメンバーを募集しています。

尖石縄文考古館では、単に見るだけの博物館ではなく、体験しながら学んでいく住民参加型の博物館を目指しています。是非様々な催しに参加して縄文時代を体験してください。



第22回縄文教室での土器づくり

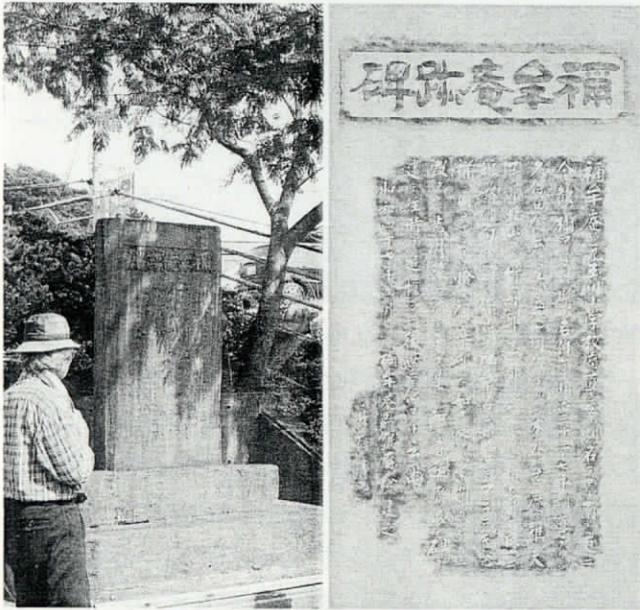
## 八ヶ岳岳麓文芸館開設される

八ヶ岳西麓では、明治から昭和初期にかけて、沢山の歌人・俳人を生み出しています。

岳麓で歌人が多く輩出されたのは、北山柏原を中心とした歌人・俳人たちの活動と、さらに島木赤彦が玉川小学校に赴任中、近隣の若者らがそこに集まり、歌を詠み、それを新聞や雑誌に投稿したのが始まりだと言われています。

島木赤彦は、俳人岩本木外と雑誌「比牟呂」を創刊したり、「阿羅々木」の編集に携わったとして有名です。彼の父親が豊平下古田にあった古田分校の訓導（教諭）だったため、赤彦は少年時代をそこで過ごし、赤彦自身も、代用教員・訓導・校長として三度玉川小学校に赴任しています。

玉川小学校の南の庭にねむの木があったことから、宿直室はねむ庵と名付けられました。そこで文学論や教育論を語り、歌を詠んだといわれるねむ庵跡には碑が建てられ、玉川神の原にあります。



ねむ庵跡碑と拓本

ねむ庵には、赤彦と並んで伊藤左千夫に師事した北山湯川の篠原志都児も訪れていました。赤彦が高島小学校に転任したあと、明治42年に志都児は、小説「野菊の墓」で有名な師、左千夫を蓼科温泉に度々招きます。そのとき、両角竹郎や両角福松らの岳麓俳人・歌人が集まり、皆で歌や句をしたための掛軸や、また左千夫が詠んだ「蓼科山歌」の掛軸が今も残されており、市の文化財になっています。

一方、俳句では湖東村に生まれた小平雪人を中心として俳句の会が盛んに開催されていました。

雪人は、俳人であり、考古学者でもありました。東京で芭蕉門下の第一人者、阿心庵永機について俳諧を

学び、師匠の阿心庵の号を継ぎ、永機の養子となりました。しかし、23歳の時、兄が早逝したこともあり、故郷へ帰り、自宅で湖東義塾を開き山浦地方の子弟の農閑期教育にあたるようになりました。

東京日日新聞と時事新報で日本ではじめて俳句欄を始め、茅野に帰ってきてからは南信日日新聞（現在の長野日報）の俳壇の選者も務めました。

正岡子規は雪人の句を褒め称え、伊藤左千夫は雪人の短歌を円熟洗練とほめています。

また考古学では、伏見宮が諏訪地方石器時代遺跡調査に訪れた際案内役を勤め、句会の同人で、尖石遺跡の発掘をした宮坂英弼は、雪人の影響で考古学を始めたといわれています。

雪人は大変お酒が好きで、「一升くらいの酒で呑んでいけとは言ってくるな。せめて三升くらいの酒があったら呼んでくれ」といったという逸話もあります。



平成12年10月13日八ヶ岳岳麓文芸館オープン

茅野市には、赤彦をはじめとした、彼の仲間の篠原志都児や弟子の両角雉夫ら歌人たちの関連資料が多く残っています。また、俳人では雪人や、雪人と交流のあった巖谷小波の資料、彼の句会の資料も沢山残されています。

こうした資料を展示、収集、保管するため、平成12年10月13日総合博物館内に「八ヶ岳岳麓文芸館」が開館しました。

市民の皆さんの情報により集まった資料を、随時100点ほど交換しながら展示しております。

また、下諏訪町在住の東洋大学名誉教授で、平成8年当館において開催された「近代短歌資料展」の指導をしてくださった伊東一夫氏の島崎藤村を中心とした文芸コレクションも展示しております。

これからもたくさんの資料を展示していきたいと考えておりますが、博物館では、その情報を集めていません。今回紹介した歌人俳人だけでなく、八ヶ岳岳麓で作歌・発句した作品の情報をぜひお寄せください。

電話 73-0300 総合博物館

茅野市美術館開館20周年記念

— 書の道一筋 — 平林舟鶴 遺墨展 2000年8月9日(水)～8月30日(水)

今年の企画展は、茅野市北山出身の書家である平林舟鶴（正貴）先生の遺墨展を開催いたしました。先生は大正7年に生まれ、昭和13年から昭和52年3月までの39年間教職生活をおくり、若い頃から書が堪能で、学生時代に欧陽詢の「皇甫府君碑」を完成させ長野師範恩師勝雲山先生も「書道部員でもないのに、これだけ書けるとは驚いた。」というほどだったそうです。教員になってからも、毎朝3時には起床し欧陽詢や褚遂良等の中国の古法帖を出勤前まで練習して、反古紙は、天井についたというから猛烈な練習量だったことがうかがわれます。昭和24年日本総合書芸展（毎日展）に入選、27年に34歳の若さで第5回県展無監査、第7回県展では審査員になり、31年32年と連続2回日展に入選しています。以後、県展審査員のほか、県書道協会副会長・県書道教育研究会長・両会の顧問として県下書道界で活躍してきました。

地元茅野市にあつては、市教育委員・教育委員長・

— 守 矢 史 料 館 —

武田氏の「龍朱印状」

天文11年(1542)より旧諏訪郡域は武田信玄の支配下に入りました。このときの支配状況を伝える文書が、数多く守矢家には伝来しています。このなかで特に目を引くのは、「龍朱印状」と呼ばれる「龍」を凶案化した判が捺された文書です。このような文書を古文書の世界では「印判状」といい、戦国大名が作成した文書の中で、自署や花押を記さないで、印章を捺しているものを指しています。

この印判状を最初に使用したのは長享元年(1487)10月20日の駿河の今川氏親(今川義元の父)黒印状です。その後、相模の北条、越後の長尾・上杉、房総の里見、武蔵の吉良、常陸の佐竹、陸奥の伊達と葛西、出羽の最上、尾張・美濃の織田、三河の徳川と東国の戦国大名を中心に使用されていました。武田家の朱印状の使用は比較的早く、武田信虎(信玄の父)が使用し始めたのが大永5年(1525)8月2日付の甲斐塩山向嶽寺宛の

市美術協会審査員・顧問・市美術協議会委員長等を務めながら、平成10年5月に80歳でその生涯を閉じるまで、諏訪地域の公民館活動・書道愛好家グループ等の指導に尽力されました。先生の書風は、古典を尊重しながらも、独自の作風を確立したもので、豪胆で男性的と評されています。諏訪・伊那地方の多くの小中学校や公民館・公園などに額や碑となって、先生の指毫された書が残されています。

思い出すままに 平林 恵美子

私は主人と一緒にしたのは、昭和18年でした。主人は学校から帰るとほとんど机に向かって字を書いています。競書に夢中か、上位に上がると得々と喜び私に見せてくれました。日曜日には、若い後輩の先生方がよく遊びに見え少々のお酒で、夜遅くまでいろいろと論じあっていました。多くのお弟子さんに尊敬され、慕われ愛され、幸せな人だったと思います。

ものです。その後、写真のような「龍朱印」が定着し、信玄・勝頼の二代にわたって、使用されました。

印判状が作られた理由は、①何らかの理由で、自署、花押が書けなくなった、②領内民政関係文書に使用されることが多く、同一内容の文書を一時に多数発給する必要が生じたからだと言われています。武田家の印判状は恒常的に作成されているため②の目的だったと考えられます。律令の頃から書式を定めるといのは権力者にとっては非常に重要なことで、戦国時代においても戦国大名は自分の支配している地域に対して、統一した書式を定めています。ここで取り上げた印判状の形式は、江戸幕府でも使用されており、武士政権の公式な書式として伝えられていきます。

龍 朱 印



茅野市の博物館・文化財課だより 八ヶ岳通信 No. 19 発行年月日 平成13年2月28日

編集・発行	文化財課	〒391-8501	茅野市塚原2丁目6番1号	TEL.(0266) 72-2101
	茅野市尖石縄文考古館	〒391-0213	茅野市豊平4734-132	TEL.(0266) 76-2270
	茅野市八ヶ岳総合博物館	〒391-0213	茅野市豊平6983番地	TEL.(0266) 73-0300
	茅野市美術館	〒391-0011	茅野市玉川500番地	TEL.(0266) 73-5440
	茅野市神長官守矢史料館	〒391-0013	茅野市宮川389番地の1	TEL.(0266) 73-7567